

2022 S Semester

学術フロンティア講義

30年後の世界へ—

「共生」を問う

場所: 21KOMCEE East K011 曜限: 金曜 5 限 (17:05~18:35)

1 4月8日 ガイダンス

2  4月15日 共生をめぐる小さな自伝的物語
青山 和佳 (東洋文化研究所 東南アジア地域研究)

3  4月22日 いかにして共に生きるか——「食ること」と「リズム」について
星野 太 (総合文化研究科 美学・表象文化論)

4  5月6日 Living in Harmony with Nature: Is It Possible And How?
呂 植 (北京大学 生物保護学)

5  5月20日 Beyond the Organismic Metaphor, or Philosophy after Cybernetics
ユク・ホイ (香港城市大学 技術哲学)

6  5月27日 共生とバイオポリティクス
中島 隆博 (東洋文化研究所/東アジア藝文書院 世界哲学・中国哲学)

7  5月30日 類を違える物と共に生きる世界: 中国思想から考える環境倫理
田中 有紀 (東洋文化研究所/東アジア藝文書院 中国哲学)

8  6月3日 「他者」と共生する「私」とは誰か——レヴィナスの思想を手がかりに
藤岡 俊博 (総合文化研究科 フランス哲学・ヨーロッパ思想史)

9  6月10日 仏教から見た共生: 私ひとりで幸せになれるのか?
柳 幹康 (東洋文化研究所/東アジア藝文書院 中国仏教思想史)

10  6月17日 先住民との共生
張 政遠 (総合文化研究科/東アジア藝文書院 日本哲学・現象学)

11  6月24日 文学研究と「ポストクリティーク」——批判は共生のための技術になり得ないのか?
村上 克尚 (総合文化研究科、日本戦後文学)

12  7月1日 共生を求めること・共生を堪えること——魯迅を再読する
王 欽 (総合文化研究科/東アジア藝文書院 比較文学・批評理論)

13  7月8日 よりよく生きるためのスペースを想像する
石井 剛 (総合文化研究科/東アジア藝文書院 中国哲学・中国思想史)



30年後の世界へ

「共生」を問う

東京大学 **東アジア藝文書院** (East Asian Academy for New Liberal Arts, EAA) は2019年度以来、教養学部で「30年後の世界へ」を共通テーマとするオムニバス講義を行ってきました。「30年後の世界」は具体的に今日から30年後の世界のことを指しているわけではありません。受講者のみなさんが社会の各領域で中心的な役割を担っているであろう未来のことを象徴的に表すものです。そこに至るまでの道のりは、みなさん一人一人が自分で、そして他の誰かと手を取り合って歩いて行くものです。**未来**はしたがって、みなさんの外側からやってくるものではなく、みなさんがわたしたちと共に創りあげていくものなのです。「30年後の世界へ」とはつまり、みなさんが自身の未来を想像するための手がかりとなる言語を探す旅の始まりを劃すわたしたちからの呼び声にはほかなりません。教養とは持てる知識の量的な豊かさではなく、**未来を創りだすために必要な言語を不断に鍛え続けるプロセス**のことを指すと、わたしたちは考えます。

2022年度の講義では「共生」という概念について問い直してみます。

共生ということばが使われるようになって久しくなりました。人、文化、社会、技術、自然などの様々な領域において、「他者」と名指されるあらゆる存在と共生することが、わたしたちの目指すべき理想の姿であるとされます。

このことばは、生物の世界において異なる生物種が相互依存の関係にあることを示す **symbiosis** に通じると理解されることがあります。したがって、実は共生とは、わたしたちが目指すべき社会の理想である以前に、わたしたちがこの世界にあって生きていること的前提条件であり、既存の事実であると言わなければならないことなのです。しかし、共生が自然界における厳然たる事実である以上、それは、赤裸々な無道徳の世界のありようでもあり、そこで表現されるのが全的な調和であるとしても、その中には個体の死滅や個体間の生存をかけた闘争が不可欠なメカニズムとして組み込まれています。まして、**人新世**と呼ばれる近代文明は、生物としての人の生を管理しながら延長することを倫理的な要請としつづける一方で、自然界における**生物の多様性**を著しく損なっています。そんな中で、**持続可能性**を探究することがいまや世界的な課題であると思われています。しかし、**SDGs** のかけ声は、人間の類としての生存（したがって人類内部の共生）を持続的に可能にするだけのものに終わってはならないでしょう。その声は、**生命を持つあらゆる種**との共生を望むもう一つの声によって応答されるべきでしょうし、いまはまだ世界に存在していない者の声をも喚び起こすものであるべきです。ましてや、持続すべきものが近代文明によって生み出されたさまざまな現実のレベルに留まっていたら、それは**近代文明**を享受する一部の人のびとの独りよがりになってしまうかねません。要するに、単なる持続を追求するのとは異なる、**新しい人間の生のあり方**が真剣に問われるべきであると言えます。

しかし、そんなことがいかにして可能になるのでしょうか？生物の世界における**共生関係**が示しているのは、**生が死と共にあるというきびしい現実**にほかなりません。だからこそ、あるべき共生について考えるためには、生が死と一対のものであることを無視することはできませんし、全的生存のために犠牲を正当化する構造を人間が創りだしてきた**現実への反省**が求められるはずで—この反省は日本から**東アジア**に向かって共生を唱えようとする場合にことさら重要な当事者責任において行われるべきです—。**新しい冷戦の到来**とも言われる今日の世界情勢のもとで政治社会がいかにあるべきかを考え、また、**テクノロジーの発展**の先にあるべき人のあり方を構想するためにも、わたしたちは、「他者」なる存在と共によりよく生きるための思索をこの世界に生を受けた人間の責任として深め、想像力を豊かにしていく必要があります。

共生を事実としてそのまま理想化するのではなく、既存の思想の枠組みの中であるべき姿を構想するのでもなく、このことばとそこから派生する一連の**言語を問い直す**ことを通じて、わたしたちが生きるべき**よりよき生のあり方**について、いっしょに考えてみることにしましょう。